

国語

注意

- 1 問題は **1** から **4** までで、15 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、
「や」などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書き、かたかなの部に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 今日は時雨模様の天気でしょう。
- (2) この絵はまだ素描の段階である。
- (3) 粘土を使って頭部の塑像を作った。
- (4) 不安定だった為替相場が安定した。
- (5) 教室でカイコを飼う。
- (6) 彼はシンボウが厚い人物だ。
- (7) わが社には慣習的に守られているフブンリツがある。
- (8) ニソクサンモンで購入した品物にしては立派だった。

2

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

バレーボール部に所属している高校二年生の「僕」は、春高予選（春の高校バレーボール大会の予選）に出場し、自分たちの試合の前に他校の試合を見ているチームメートを見かけた。

観客の山から少し外れたところに、柿間^{かきま}さんの姿があった。鉄柵にもたれかかって、コートを見下ろしている。その隣には北村^{きたむら}もいた。

「お疲れ様です。」

僕は二人に近づいていって、柿間さんに声をかけた。

「お、景^{けい}。みんないま、なにしてんの？」

「外^{ぐわい}います。」

「あ、アップ^{*}してんのか。」

「いやほぼ日向^{ひなた}ほっこみみたいな感じで。遊晴^{ゆうせい}は三重跳びしましたけど。」

「なにやってんだ。」

「この試合、どことどこですか。」

「照星学園と、どこだっけ。」

「笹ヶ丘です。」

北村が答えた。だそうです、と柿間さんは付け足す。

「ああ、照星。結構強いエースがいるとこっすね。」

「そうそう、あの二番の奴^{やつ}。」

照星学園のエースは襟足を刈り上げた短髪で、髪型についてだけ言えば遊晴と似ていたが、相手を射殺するような鋭い眼光と点を決めたときの気迫は、軽やかにバレーする遊晴とはまるっきり対^A的だった。

「インハイ予選のときも、俺らこうして見てたよなあ。」

柿間さんは口をへの字に曲げて、つぶやく。僕も柿間さんと同じように、六月の試合、照星学園と稲村東高校の試合を思い出していた。

エースには試合中、何本も何本もトスが上がる。負けているときは特に。もはや宿命とも言える執拗さで、トスが回ってくる。インターハイ予選で稲村東高校に終始圧倒されていた照星も、エースにトスを集め、そして集まった分だけエースのスパイクは稲村東のブロックに阻まれた。照星のエースは荒い息で膝に手をつき、恨めしげに稲村東の真っ赤なユニフォームを睨みつけていた。

僕たちは、その試合の勝者と対戦する予定だった。だからギャラリィに並んで、試合を黙って見ていたのだが、二校の実力差は歴然で、照星にはチャンス到来、みたいな瞬間もなかった。

そして僕たちも、そのあとの準決勝で稲村東高校に惨敗した。

「この感じだと、照星が上がってきそうですね。」

照星学園は着実に点数を重ね、目の前の試合は終盤に差し掛かっていた。

「だね。」

と、柿間さんは同意する。「来週、初戦は照星。そのあと、稲村東。」

「稲村東以外が勝ち上がってくることは。」

「ないでしょ、さすがに。」

(1) 柿間さんは堅い声で言い切った。ですよね、と返す。

夏のインターハイ予選。明鹿が県大会の準決勝まで進んだのは初めてのことだった。そのころ僕はまだベンチだったが、レギュラーの先輩たちの高揚感は一瞬に取るようにわかった。もっと勝ち進める。準決勝の相手、稲村東は全国常連の強豪校だけど、それでも勝てるんじゃないか。そんな空気が部に流れていた。でも結局、あっさり負けた。手も足も出ないってこういうことか、とベンチから見ていた僕は思った。県大会ベスト四という結果を残し、インターハイ予選は負けて、終わった。

その稲村東高校と、春高予選でもトーナメント表の同じ山にいる。お互い勝ち上がれば、今度は準々決勝で戦うことになる。その偶然を、夏に負けたときコートに立っていたメンバー、特に引退せずに残った三年生がどう思っているかは、僕にだって容易に想像できた。

「そういえば梅太郎はどこ行きました？ 中庭にもいなかったんですけど。」

「ああ、梅ならあっち。」

視線の先には、他校の選手と喋る梅太郎がいた。練習試合や大会のたびによく見る光景だったが、僕なんかは他校の奴となにをそんな楽しそうに話すことがあるんだろうといつも不思議に思ってしまう。

「……喋る相手がいて、うらやましいよ。」

柵の上で組んだ腕に顎をのせて、柿間さんは、ふうと息を吐き出した。「俺もさ、梅みたいにいままでいろんな学校の同学年の奴と仲良くなってきたけど、まあ当然、今日この体育館にはそいつら誰もいないわけじゃん？ それがなんか、めっちゃ寂しい。」

「あーっと、今日は別の会場にいるとかですか？」

「夏で引退してるからでしょ。」

柿間さんの向こう側から、北村が口を挟んだ。柿間さんは顔の下半分を腕の間に埋めたままくぐもった声で、そうそう、と発する。

「俺が仲良かった他校の同期たちは、みんなもう引退した。」

(2) 僕がなにも言えないでいると、また柿間さんはゆつくり口を開いた。

「……このままさ、春高予選で勝ち進んで、稲村東にも勝って、最後まで負けないで、春高出場が決まったら、決まったらつかい出場が決まって数日経ったら、俺ちよっと、あーあって思うかも。だって、引退は一月だぜ？ やばいでしょ。バレー漬けの生活がまだまだ続く。さすがにバレーに高校生活捧げすぎだろ。」

柿間さんの頭越しに北村と目が合った。北村がどう感じているのかは

わからなかったが、僕はその弱気で自嘲する*ような調子の言葉を聞いて、なんとなく嬉しくなっていた。いつも以上に柿間さんを身近な存在に感じた、というか。

「いや、試合前にする話じゃないな！」

柿間さんは顔を上げると、明るく言い放った。「お前ら、俺がこんな話したの絶対秘密にしとけよ。同期はもちろんだし、二年でも遊晴とか梅太郎には聞かせらんない。てか忘れて。記憶から消しといて。」

頼むな、と柿間さんは僕と北村を交互に見た。

「たしかに梅太郎は理解してくれなそう。」

北村は小さく笑った。「は？ 意味わかんないです、とか言いそうですな。」

うわ言いそう、と柿間さんも笑う。

「でも僕、柿間さんの気持ちわかる気がします。」

わずかに照れくささを覚えながら、僕は言った。「⁽³⁾というか、わかります。」

絶対に言っておきたいと思ったから発した言葉だった。しかし振り返った柿間さんに、探るような目を向けられる。ありがとな、とか言われるんだと思っていたから、あれなんか間違えたかな、と急に不安になった。

「いや、景。わからなくていいよ。」⁽⁴⁾

柿間さんはきっぱりと言い放った。僕は思わず身を固くする。

先輩は眼下の試合に目を落とした。

「さっき言ったの、まあ嘘ではないけど、でもメインの感情じゃない。勝って、あーあまだ引退先かっと思うより、負けたときの悔しさの方が絶対、何百倍もでかい。」

一言ずつ、響きを確認していくように柿間さんは言った。

真下のコートで、照星学園のエースのスパイクをレシーバーが弾いた。

高く上がったボールは僕たちの近くの柵に当たって、ごとと音を立てる。主審の笛が鳴って、両チームの選手たちはエンドラインに並ぶ。セツトが終わったらしい。

「照星にも、稲村東にも勝つよ。」

柿間さんはやりと不敵に笑った。

「景たち後輩には悪いけど、やっぱり俺らは簡単に引退する気はない。」僕はなにも答えなかった。なんて返したらいいのかわからなかったし、わからなかったということも気取られないように、第一セツトが終わって人がいなくなったコートに目を向けたままにした。輪郭の曖昧な霧のようなものが胸の辺りで生まれたのを感じ、息苦しくなる。僕と同じくなにも言わない北村に、なんか反応しろよとは思った。

「なにしてんの。」

梅太郎が戻ってきた。僕と柿間さんの間に割り込んでくる。「敵^{かな}わいな、みたいな顔で照星の試合見て。」

「そんな顔してた？」

僕はゆっくり答えた。「まあ実際、照星のエースは強いし。」

「そうでもないだろ。」

梅太郎は乱暴に言い切った。⁽⁵⁾胸の内で、霧のようななか^{かな}がさらに広がっていくのを感じる。柿間さんが「頼もしい後輩だなあ。」と朗らかな笑い声を上げた。

「あざす。柿間さん、外にアップしに行きませんか？」

「そうだね、そろそろ行こうか。」

「景は？」⁽⁶⁾

「僕は、まだいいや。」

梅太郎は頷くと、照星はサブレシーブが雑だ、とか、フルセツトになったらだるいすね、とか柿間さんと話しながら体育館を出ていった。僕と北村だけ取り残される。

僕たちは一人分の間隔を空けたまま並んで、いつの間にか再開した試合のネットを挟んでボールが飛び交う様子をぼうっと眺めた。ふと、早く試合したいと思った。

(坪田侑也「八秒で跳べ」による)

〔注〕 アップ——準備運動をすること。

執拗さ——しつこい様子。

自嘲——自分で自分をあざけること。

あざす——「ありがとうございます」の略。

〔問1〕 空欄[A]と[B]に当てはまる漢字一字をそれぞれ答えよ。

なお、[A]の読みはシヨウである。

〔問2〕⁽¹⁾ 柿間さんは堅い声で言い切った。とあるが、この理由として最も適切なのは次のうちではどれか。

ア 来週再び稲村東や照星と対戦することになり、その偶然の巡り合わせのために緊張が高まっているから。

イ 稲村東に以前負けたことを思い出して沈みかけていた気持ちを、なんとかかき立てようとしているから。

ウ 強豪校である稲村東との試合が近づき、後輩たちの緩んだ気持ちを引き締める必要性を感じたから。

エ 以前自分たちを倒した稲村東なら必ず勝ち上がると思い、相手への闘志をみなぎらせているから。

〔問3〕⁽²⁾ 僕がなにも言えないでいると、また柿間さんはゆっくり口を開いた。とあるが、僕がなにも言えない理由として最も適切なのは次のうちではどれか。

ア 他校の同期の引退の寂しさまでを闘志に変えようとしている柿間さんの姿勢についていけないと思い、黙ってしまったから。

イ 柿間さんの感じていた寂しさの正体を自分は見抜くことができなかったと感じ、どのように答えればよいか分からなかったから。

ウ 自分の先輩たちは引退していかないのに多くの三年生が辞めていった他校の人たちに不快感を抱いたが、口に出せないでいるから。

エ 自分を置き去りにして柿間さんと北村との会話がテンポよく進んでおり、なかなか口を挟むきっかけを見出せずにいるから。

〔問4〕「⁽³⁾というか、わかります。」「いや、景。わからなくていいよ。」⁽⁴⁾

とあるが、この二人のやりとりから読み取れることとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 景は柿間さんの消極的な言葉に意外性と親しみを感じ同調しようとする姿勢を見せており、一方柿間さんは自分の言葉に賛同する景の様子を探りながら、改めて自分の思っているところを伝えようとしている。

イ 景は尊敬する柿間さんの発言には賛同すべきだと思いその意を伝えようとする姿勢を見せており、一方柿間さんは未来ある後輩には自身の考えを大事にしてほしいと考えて自分の発言を打ち消そうとしている。

ウ 景は突然弱気な発言を始めた柿間さんの真意がつかめずにいて表面上は理解したような姿勢を見せているが、一方柿間さんは後輩に理解されていないことを察し、はじめからきちんと説明し直そうとしている。

エ 景は柿間さんの言葉に自分と同じような発想を見て共感する姿勢を見せているが、一方柿間さんは二年生に自分の気持ちに分かるはずがないと反発心を感じながらも、先輩として穏やかに後輩をたしなめている。

〔問5〕胸の中で、霧のようななにかがさらに広がっていくのを感じる。⁽⁵⁾

とあるが、この理由として最も適切なのは次のうちではどれか。

ア 柿間さんとの会話で生じた正体のはっきりしない違和感を、梅太郎と話すうちに再び感じ取ったから。

イ 自分の気持ちを率直に話さない北村の様子を見て、心の中の不快感が大きくなるような気がしたから。

ウ 戦う相手はもはや照星ではなく稲村東だと捉えている梅太郎の言葉に、ついていけないものを感じたから。

エ 柿間さんに対して感じた不信任感が、梅太郎の言葉によってバレー部員全体への不信任感となってしまったから。

〔問6〕「⁽⁶⁾景は？」とあるが、これを発言した人物として最も適切なのは次のうちではどれか。

ア 柿間 イ 北村 ウ 梅太郎 エ 遊晴

〔問7〕本文の内容や表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 多様な登場人物の感じている個々の思いを具体的に述べることによって、人間関係の複雑さを表現している。

イ 登場人物の思ったことには「」を付けず、実際の発言には「」を付けることによって、場面の臨場感を高めている。

ウ 景の気持ちの揺らぎが多く、登場人物と接することによって解消して、彼の成長に結びついたことを描いている。

エ 現在の試合と過去の試合を続けて描き、また複数の相手との会話を述べることによって景の感情の軌跡を表している。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

本書の定義では、利他は「自分の大切にしているものよりも、その他の人の大切にしているものの方を優先すること」でした。この定義を改めて考えてみると、次の主張が取り出せると思います。

(1) 利他は、本質的に「葛藤」を内包している――。

どういうことか？

たとえば、哲学研究者の永井玲衣『水中の哲学者たち』で語られている次のようなエピソードです。

ある講義での風景。いくつかの理由あるいは原因があり、「わたし」はその講義の教科書を買っていなかった。「110 ページをひらいて」と先生が言う。教科書を持っていないので、とりあえず持っていた紙に指示されたページ数をメモしていたら、ある気配を感じた。隣の席の男性が心配そうにこちらを見ているのだった。そして、彼は落ち着かない様子だった。教科書を「わたし」のいる右隣に少し寄せたり、引っこめたり、あえて閉じてみたり、と。

おそらく彼は、わたしに教科書を見せるべきかどうか、葛藤しているのだろう。だが、彼はわたしと別に知り合いではない。

(…)

わたしは彼の挙動を肌で痛いほどに感じながら、「道徳をゆさぶってごめん」と思った。

彼の中にはおそらく、困っているひとを助けるべきだ、という道徳がある。だが、同時に、受講生としての義務に反している、ノートすら持っていない見知らぬひとに手を差し伸べるべきなのか、という疑問もあるだろう。

申し訳なきが極まってしまったわたしは、思わず机に突っ伏してしまった。ごめん！ やさしいひと！ わたしは寝ているひとなので話しかけなくて大丈夫！！

（永井玲衣『水中の哲学者たち』、強調引用者）

ここにある二つのものの衝突。一つは、ある講義の受講生が従うべき義務、規則。この講義を受けるにあたり、教科書の購入や準備が事前にアナウンスされていたはずだ。そして他の受講生たちはそれをきちんと用意していた。授業に必要なテキストを持参しなければならないというルール、規範。もう一つは、目の前にいる、困っているであろう人を助けなければならない、サポートしなければならないという衝動あるいは切迫です。「テキストを持つてくるのがルール。だから、忘れたやつが悪い」と見放すことも当然できるでしょう。あるいは、単に見て見ぬふりをすることも。しかし、隣にたまたま座った彼はそれができなかった。道徳を揺さぶれた、やさしいひとがそこにいたのです。

この事例に利他があると言えるためには、隣にいたその男性にとって「自分の大切にしているものよりもテキストを見せることを優先しようとした」と言えなければなりません。彼にとって何が大切なものだったかという点、それはルール、規範です。これは彼にとってだけでなく、サピエンス全員にとってもそうです。ルールからの逸脱は社会的な動物である僕らにとっては死活問題です。なぜ死活問題なのかというと、集団、共同体から排除されるリスクがあるからです。集団を離れては生きてゆけない動物であるがゆえに適応度が下がるのです。(3)つまり、「そうすべき」という共同体における規範は万人にとっての大切なものと言えます。

永井は道徳／義務という概念で区別していますが、本書ではこのエピソードのような二つの対立を倫理／道徳という区別で考えてみたいと思

います。

哲学者の池田晶子^{いけだあきこ}は道徳と倫理を次のように区別しました。

道徳と倫理との違いとは、単純明快、強制と自由との違いである。「してはいけないからしない」、これは道徳であり、「したくないからしない」、これが倫理である。「罰せられるからしない」、これは道徳であり、「嫌だからしない」、これが倫理である。

(池田晶子『言葉を生きる』)

教科書は各自が自分で用意すべきであるというのが道徳(≡共同体の規範)であり、それにもかかわらず、見知らぬ隣の人に教科書をシェアしようとする、つまり受講のルールを思いがけず破ってしまう(破ってしまいそうになる)のが倫理(≡今日・ここ・私の規範)です。なぜ彼は堂々と教科書を見せようとしなの？ なぜ道徳心があるのか？

それは、表立って見せてしまったら、「教科書は誰かに見せてもらえばいい」ということになって、自分で購入したり用意したりしないフリーライダーが増えてしまうという懸念^{けんねん}があるからでしょう。つまり、「真面目に受講する」という規範が守られなくなる可能性があるからです。

倫理は道徳と衝突します。⁽⁴⁾そして、倫理は時として、反道徳的となる可能性を帯びています。倫理は池田のいう「罰せられるからしない」を乗り越えてしまうことがある。

このように、ある事象を利他と呼ぶためには、そこに矛盾や衝突、ためらい、逡巡^{しゆんじゆん}、すなわち葛藤がなければならぬ。

利他とは「自分の大切に行っているものよりも、その他者の大切に行っているものの方を優先すること」というのは、そのような、時に反道徳的となる可能性を秘めているのです。

では、このようなつきりとした葛藤がないものは利他ではないのでしょうか？

僕としては、そのような「葛藤なき寄り添い」には別の名前を与えたいと思っています。

明らかな葛藤があるわけではない、真^まっ直^すぐ相手へ向けられた善き行い。

僕はそれを「ケア」と呼ぶべきではないかと考えています。

本書では「ケア」をこう定義します。

ケアとは、その他者の大切にしているものを共に大切にすることを営む全体のことである。

⁽⁵⁾そして、そのケア概念は「他者の生を支援すること」であり、このケア概念に「自身の従っている規範との衝突」(これまでの言い方では「自分の大切にしているものよりも、その他者の大切にしているものの方を優先する」という条件が加わった時、ケアは利他に変わる。

つまり、本書の定義では、利他はケアの部分集合であり、言い換えれば、ケアは利他の必要条件(利他はケアの十分条件)である、ということになります。

なぜ、ひとは時にケアをためらうのか？

それは、そのケアを「システム」が禁じるからです。先の教科書を見せてくれようとした受講生の事例では、大学の教務システム、講師・受講生というシステムがあります。いわゆる組織における「内規」です。組織のメンバーであること、ある共同体の内部の人間であることが、その者のケアをためらわせ、葛藤を生む。

「システム」は個別の出来事を考慮できません。

個別の出来事に配慮するシステムというものは存在しません。それは

端的な形容矛盾です。そして、システムに従順な者は思考する必要があるりません。なぜなら、全てはシステムが決定してくれるからです。そこでは「決まりなので」というまさに決め台詞ざりふがきちんと用意されています。もちろん、それは公平性や公共性といった価値に基づいて設計されたものではありません。あるいは、人治に陥らず、あくまで法治として無秩序になるのを防ぐ意味合いもあるでしょう。

ですが、システムがケアし切れない者、システムから「はぐれてしまった者」との邂逅かいこうが僕らに利他を促す。

そして、利他はその定義上、僕らをシステム・コード・規範から自由にする。

ケアと利他を概念として分けることを提案するのは、利他にはそのような「自由」を発生させる力があるからです。

(近内悠太「利他・ケア・傷の倫理学」による)

〔注〕 サピエンス——人類のこと。

シエア——共有すること。

邂逅——めぐりあうこと。

コード——ここでは規定のこと。

〔問1〕⁽¹⁾ 利他は、本質的に「葛藤」を内包している——とあるが、この「葛藤」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 個人が社会で負うべき義務と、見て見ぬふりをすることで負う罪悪感とを両立させようとしていること。

イ 困難な状況にある他者への思いと、遵守すべき社会のルールへの思いとが折り合っていないこと。

ウ 共同体で暮らす社会的な自分と、あえて社会を逸脱しようとする自分とが矛盾してしまうこと。

エ 個人としての正義を追求する規範意識と、困っている他者への衝動とがせめぎ合っていること。

〔問2〕⁽²⁾ 申し訳なさが極まってしまったわたしは、思わず机に突っ伏してしまっぶた。とあるが、ここでの「申し訳なさ」とはどういうものか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 自分だけ講義に必要な教科書を購入せず、ノートすら持ってきていない、という申し訳なさ。

イ 教科書を買っていないかった理由や原因を、周囲の人々に説明することができない、という申し訳なさ。

ウ 教科書を持参しないという行為によって、相反する思いを隣の人に抱かせてしまった、という申し訳なさ。

エ 隣に座る学生がわたしに教科書を開いて見せたのに、恥ずかしさが優先して見なかった、という申し訳なさ。

〔問3〕⁽³⁾ つまり、「そうすべき」という共同体における規範は万人に

とつての大切なものと言えます。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 社会的な動物である人間にとって、倫理は優先すべきことなので、集団内の規則について再確認する必要があるから。

イ 社会的な動物である人間にとって、規範から外れないことが集団内に存在できなくなることに直結してしまうから。

ウ 社会的な動物である人間にとって、あえて集団から独立して生きていくためには規定を守ることが大切だから。

エ 社会的な動物である人間にとって、共有している規律を守ることが所属する集団に順応^{じゅんおう}するための第一条件だから。

〔問4〕⁽⁴⁾ そして、倫理は時として、反道徳的となる可能性を帯びていま

す。とあるが、これはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 倫理的な行為を成立させようとする場合には、共同体における規範を無視する必要性が出てくるから。

イ 道徳的に正しい行動をする際の条件として、倫理と道徳と同時に成立していることが必要であるから。

ウ 道徳は共同体を成立させていくために必要なものであるが、時として倫理を乗り越えてしまう場合があるから。

エ 倫理が必要となる場合においては、反道徳的になることが必要であるという広く認められた社会的な合意があるから。

〔問5〕⁽⁵⁾ そして、そのケア概念は「他者の生を支援すること」であり、

このケア概念に「自身の従っている規範との衝突」、これまでの言い方では「自分の大切にしていくものよりも、その他者の大切にしていくものの方を優先する」という条件が加わった時、ケアは利他に変わる。とあるが、ここで筆者がケアと利他について述べようとしていることは何か、について□□のように説明するものとする。

□ A □ と □ B □ に入る最も適切な語句を本文中からそれぞれ二十字で抜き出して書け。

利他はケアに含まれており、□ A □ という点では共通しているが、利他には □ B □ をもつという条件がある。

〔問6〕

波線部ケアと利他を概念として分けることを提案するのは、利他にはそのような「自由」を発生させる力があるからです。とあるが、ここでの「自由」についてあなたはどのように考えるか。あなた自身の経験や見聞を含めた具体例を挙げて根拠とし、二百字以内で書け。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

A ⁽¹⁾ 山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば

＊みなとのけなめき
源 宗于（古今集・冬）

訳▼山里は冬の季節にこそ、ひとしおさびしさが感じられるよ。人の訪れも途絶え、草も枯れてしまったと思うと。

この歌の舞台は、山里。にぎやかな平安の都を遠ざかり、山の中にひきこもって暮らしている人の思いをうたった一首です。ひとりになりたひと望み、いざそれが実現すると、こんどは人恋しさがつのつてくる、人間とは矛盾した感情の間をゆれ動く存在なのかもしれません。山里の住まいは、ただでさえさびしいもの。それが、冬の季節はことさらさびしさが身にしみるといのです。この歌には「かれぬ」という一つの言葉に「離れぬ」と「枯れぬ」の二つの意味が込められています。「人目」とは、会いにくる人があること、人の出入りを意味します。春や夏、秋の季節なら、来訪者もいたことでしょう。冬になると、山の住まいでは雪に降り籠められることも、珍しくなかったはず。来訪者の足は遠のき、絶えてしまう。草花も枯れはてて、もはや目を楽しませ、心をなぐさめてくれるものは何一つない。そのような自らの置かれた状況と自然の風景、「人目も離れぬ」「草も枯れぬ」というべきところを重ね合わせて「人目も草もかれぬ」という表現でまとめたというわけです。このレトリック、修辞技巧が、「掛詞」とよばれるものです。

歌人たちは、原則として五・七・五・七の三十一文字（音）の限られた範囲の中で、自分の言いたいことを表現しなければなりません。国語のテストの、「三十文字以内で説明しなさい」という字数制限の問題を思い浮かべてみてください。制限なく自由に書ければいいのになあ、

もう少し書きたい、もどかしい思いは、多くの人が経験しているのではないだろうか。昔の歌人たちも、同じ気持ちでした。一首には字数制限がある、けれども伝えたい思いは溢れるほどたくさんある、そんな欲求から編み出されたスグレモノが、「掛詞」だったともいえるでしょう。一つの言葉で、複数の意味を伝えることができれば、字数の節約になり、より多くの思いを相手に届けることができます。この画期的なアイディアは、和歌の修辞法として、とくに「古今和歌集」以後、さかんに用いられるようになっていきました。「なァんだ、掛詞は『ダジャレ』や『ごろ合わせ』と同じ仲間なのか」と感じた人は鋭いですね。でも、それほど単純ではありません。これから掛詞の奥深い世界へと、みなさんを案内いたしましょう。

B たち別れいなばの山の峰に生ふるまつとし聞かば今帰り来む

＊ありわらのゆきひろ
在原行平（古今集・離別）

訳▼お別れをして、私はこれから因幡に行くのですが、その因幡の山の峰に生えている松ではないけれど、あなたが私を待っていてくれるとお聞きしたならば、いまずぐにでも帰って参りましょう。

掛詞が成り立つ背景には、同音異義語の存在が指摘できます。さきほどの「人目も草もかれぬ」を例として図式化してみましょう。

人目も	}	かれぬ	(離れぬ)
草も		(枯れぬ)	

「人目」と「草」の二つの主語に対して、述語は「かれぬ」一つ、しかも二重の意味（離・枯）に働き、それぞれで体言（主語）を受けています。この場合、掛詞はいずれも用言（述語動詞）として機能していました。

「たち別れ」の歌は、どうでしょうか。作者は因幡国に^{*}国守となつて赴任する身でした。離別の部に収められていますから、旅立っていく別れの場面での歌ということになります。おそらくは親族や友人ら、気心の知れた人々との送別の宴でよまれた歌だったのでしょうか。この歌には、掛詞が二箇所用いられています。図式化してみましよう。

① たち別れ往なば

因幡の山の峰に生ふる松

② 待つとし聞かば今帰り来む

「往なば」と「因幡」、「松」と「待つ」が掛けられています。作者が伝えたい胸の内は下句（和歌の後半部分（七・七））である③の部分。⁽²⁾それはじめの「待つ」という一点に、それまでの初句以下が一気に流れ込んで来るような印象を与える作品です。「人目も草もかれぬ」の掛詞は、図式化するとよくわかりますが、豆電球を並列にして電池とつないだような形をしていました。並列型の掛詞といってもよいでしょう。この並列型とは明らかに異なっているのが、「たち別れ」で使われている二つの掛詞です。この歌の場合、①から②へ、そして②から③へと、文脈が二度、転換しているのがわかります。文脈が変わる箇所には、いずれも掛詞が使われていました。同音異義語とは、そもそも音は同じでも意味が違う別々の言葉を指します。その性質をうまく活かしたなら、掛詞を転換点として、それまでの文脈をいったん閉じ、もう一つ別の意味を起点に、
I 新しい文脈を開始することができはります。このことを利用して、「たち別れ」の歌は①から②へ、
II ②から③へと、
III ターミナル駅で列車を乗り継ぐように、一首が作られていたのです。具体的に説明してみましよう。
IV 「いなば」駅。①の文脈は「往なば」で終了し、新たに「因幡」ではじまる②の文脈がスター

トします。その②の文脈も次の「まつ」駅に到着すると、「松」で完結。そしてまた別な「待つ」ではじまる③の文脈がスタートする、というわけです。「人目も草もかれぬ」が並列型の掛詞、であるとすれば、「たち別れ」の掛詞は、接続型の掛詞といえるでしょう。前者が一語を「離れぬ／枯れぬ」と二つの意味に分けていたことに注目すれば、「分配型の掛詞」と定義してよいかもしれません。いっぽう後者は、まったく異なる文脈をつなぎ合わせる機能に着目すれば、「結合型の掛詞」とでもいえるでしょうか。掛詞には、大きく分けて並列分配型と、接続結合型とがある、と思つて下さい。

「たち別れ」の歌、前段では掛詞の位置で①／②／③の三つに分けましたが、実は①と③は同じ文脈で、そこに異質な②が割り込んだ形なのでした。①と③が人間の行動をうたっているのに対し、二つの掛詞「因幡」と「松」で区切られた②は、自然の風景そのもの。この歌の骨格は、

たち別れ往なば、「待つ」とし聞かば今帰り来む。

という文脈につきています。私は都を去っていきますが、「待つていますよ」という声が聞こえたなら、いつでも帰ってきますから。でも、そうしたストレートな惜別の思いだけで一首が終わってしまうのは、味気ないと考えたのでしょうか。これから下っていく任国、因幡の名所を読み加えることで、作者は送別の席に連なる人々の脳裡に、遠い赴任先の風景を具体的にイメージさせることを試みたのです。「往なば」「待つ」という人間の行動に同音異義語を重ね合わせて「因幡の山の峰に生ふる松」という現地の風景を、大胆にはめ込んだのでした。けれども掛詞のおかげで接続もなめらかに違和感なく収まり、叙景が加わったことで厚みのある、見事な一首に仕上がったのでした。

「往なば」から「因幡」へ、人間の動作・行動から同音を介して地名へと続ける、このような掛詞の用法は、意外に多いのです。次の歌も、そうした例の一つです。

(3) **これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬもあふ坂の関** *せみ 蟬
丸 まる (後撰集・雑二)

訳▼これがまあ、都から東国へと行く人もそれを見送って都へと帰る人もここで別れ、一方で知っている人も知らない人もここで会うという、逢坂の関なのだなあ。

山城国（京都府）と近江国（滋賀県）の境にある逢坂山には、関所が置かれていました。有名な逢坂の関です。都から見て、この関よりも向こう側の地域が、当時は「関東」（関の東の意）、東国でした。東国に赴く知人がいると、都の人々はこの関所まで同道し、見送ったと伝えられています。そのような別れの場所であると同時に、いっぽうではまた、見知った者も知らない者も出会う、文字通り逢坂の関であったよ、という一首です。「逢坂」は旧かなづかいでは「あふさか」、「会坂・相坂」と表記されることもあり、「知るも知らぬも会ふ」から「逢坂の関」へと続ける、連接の役割を、掛詞がはたしているのです。

掛詞とは、繰り返しますが、同音異義語を利用して一つのことば（音）に複数の意味をもたせる修辭上の技法です。「枯れ」と「離れ」、「因幡」と「往なば」、「松」と「待つ」、「逢坂」と「会ふ」。このほかにまたたとえば「長雨」と「眺め」、「夜」と「寄る」、「秋」と「飽き」、などがあげられるでしょう。感覚の鋭い人なら、もしかすると掛詞について、何か気づいたかもしれませんね。「枯れ」「因幡」「逢坂」「松」「長雨」「秋」「夜」などは、いずれも自然界に存在する景物・地名・景観、あるいは

気象、時の移ろいと密接に関係しています。いっぽう「離れ」「往なば」「待つ」「会ふ」「飽き」「寄る」などは、人間の感情や行動を表す言葉ばかりです。

和歌の歴史をさかのぼると、古来より日本人は、景物や風景など、自然を対象に歌をよんできました。自然をじつと観察しているうちに、外界の景色に触発されてしだいに歌人の内部に感情が熟成され、形を成し言葉となり、一首の和歌として発現してくる、それが古代の和歌の一般的な姿でした。

近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのに古思ほゆ *かきものひとまろ 柿本人麻呂
(万葉集・卷三)

訳▼琵琶湖の暮れがた波にたわむれている千鳥よ、おまえが鳴くので心もしんみりと昔のことが思い出されてならないよ。

近江（滋賀県）の海とは、琵琶湖のことです。琵琶湖の夕景をながめているうちに、千鳥の鳴き声を耳にした作者の心中に、ある種の感情が形成され、それが三十一音の文学となつて口をついて出てきたというわけです。

C **難波江の葦のかりねの一よゆゑみをつくしてや恋ひわたるべ**
き *うかみんべつとら 皇嘉門院別当 (千載集・恋三)

訳▼難波江の葦の刈り根の一節のように、短い旅先での一夜の仮寝のために、難波の落標ではないけれど、この身をささげて、ひたすら恋慕い続けるというのでしょうか。

もともとは「旅宿に逢ふ恋」という題（テーマ）でよまれた題詠の歌でした。旅先の宿での一夜かぎりのはかないロマンスをうたった作品です。

「刈り根」と「仮寝」「一節」と「一夜」、そして「落標」と「身を尽くし」。これでもかと掛詞が多用されていますし、加えて縁語も複雑です。しかし、言葉の続き具合はよく練られていて、むしろすっきりとした美しささえ感じられる一首です。難波江とは大阪湾の遠浅の海岸、とくに淀川河口あたりを指しますが、古く「万葉集」の時代から、葦の一面に生い茂る景色が好みよまれてきました。葦の短いひと節にもたとえられるような、つかの間の一夜。その短さに重ね合わせ、植物の葦に関係の深い言葉である「刈り」「根」と「仮寝」を掛けています。また難波の海には、舟の航行を助けるために、海上の道しるべとして「落標」が建てられており、これも湾の景物として有名でした。この歌は初句のうたい出しから一見、難波の風景を描写しているように言葉が続け、二句・三句・四句の掛詞を橋渡しに、いつのまにか本来のテーマである人の世のほかならぬ恋へと導いていくのです。⁽⁴⁾このように、自然と人事と、二重の文脈が同時に成立するケースが多いのが、掛詞を用いた和歌の特徴でもあります。

難波江の葦の刈り根の一節（ゆゑ）落標 自然詠 叙景
仮寝の一夜ゆゑ身を尽くしてや恋ひわたるべき 人事詠 抒情

一夜の恋なのに、いやむしろ夢のような逢瀬だからこそ、相手への恋慕を長くひきずらざるを得ない、作者がもつとも伝えたい下句へと読者を巧妙にいざなっていく、その仕掛けは、三つの掛詞が担っていたのです。三十一文字の限られた世界を、豊かに押し広げることができる、重層的に立体的に、一首を変化に富んだ深みのあるものへと変える働きをもつ「魔法のことば」、それが掛詞なのだということが、実感としてわかっていただけたと思います。

（小林一彦「掛詞」（一部改変）による）

〔注〕

源 宗子——平安時代の歌人。
在原行平——平安時代の歌人。
因幡——現在の鳥取県東部。
国守——地方官の長官。
脳裡——「脳裏」に同じ。
蟬丸——平安時代の歌人。
後撰集——「後撰和歌集」の略称。
柿本人麻呂——飛鳥時代の歌人。
皇嘉門院別当——平安時代の女流歌人。
千載集——「千載和歌集」の略称。
逢瀬——男女がひそかに逢うこと。

〔問1〕

山里は冬ぞさびしさまざりける人目も草もかれぬと思へばとあるが、「人目も草もかれぬ」とはどのような情景を表しているのか。本文中から該当する箇所を五十五字で抜き出し、始めと終わりの五字を書け。

〔問2〕 次の①、②に答えよ。

① 離別とあるが、この熟語と同じ構成のものを、本文中の波線部アからエのうちから選べ。

ア 複数
イ 大胆
ウ 触発
エ 恋慕

②

I

から

IV

に入る適切な語句を次の語群から選ぶときの組み合わせとして最も適切なものを選べ。

語群

A あたかも B まず C ところで D さらに
E まったく F しかし G ただし

ア I → B II → C III → D IV → G
イ I → D II → F III → G IV → B
ウ I → E II → D III → A IV → B
エ I → F II → E III → C IV → G

〔問3〕 そのはじめの「待つ」という一点に、それまでの初句以下が一

気に流れ込んで来るような印象を与える作品です。とあるがこれは
はどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア ①と②の内容がともに転換点と思われる「待つ」という言葉に集約
されている、ということ。

イ 並列関係になっている①と②のそれぞれが、「待つ」という言葉を
導いている、ということ。

ウ ①が②と、②が③と接続することで、「待つ」という言葉の理解を
促している、ということ。

エ ②の「松」と③の「待つ」とが並列され、和歌の状況を明確にして
いる、ということ。

〔問4〕 ⁽³⁾これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬもあふ坂の関と

あるが、この歌を次の〈例〉を参考にして図式化した場合、最終
行に来るものを抜き出して書け。

〈例〉

① たち別れ往なば

② 因幡の山の峰に生ふる松

③ 待つとし聞かば今帰り来む

〔問5〕⁽⁴⁾ このように、自然と人事と、二重の文脈が同時に成立する

ケースが多いのが、掛詞を用いた和歌の特徴でもあります。とあるが、次のうちから具体的な例を述べたものとして最も適切なものを選べ。

ア Bの和歌にあるように、「因幡」と「松」という自然物を和歌の中で表現することと、別れと帰ってくるという明らかに矛盾した人の心情とがつながりを持っている、ということ。

イ Bの和歌にあるように、「因幡」という自然物としての現地の風景を詠み込むことと、「待つ」という人間の思いが言葉となっていくことがつながりを持っている、ということ。

ウ Cの和歌にあるように、葦の節である短い一節という自然物を見ることと、短い時間やつかの間の一夜という人に関する事柄がつながりを持っている、ということ。

エ Cの和歌にあるように、海上の道しるべとしての「落標」という自然物と、身を捨てても成立しない恋という人間の感情とがつながりを持っている、ということ。

〔問6〕 本文中で筆者は「掛詞」についてどのように考えているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

のうから最も適切なものを選べ。

ア 一首には字数制限があるが伝えたい思いはあふれるほどたくさんあるので、複数の言葉から一つの思いを確実に伝えるという願望から編み出された技巧、と筆者は考えている。

イ 一つの言葉に複数の意味をもたせて理解させることによって、和歌に具体的なイメージや変化に富んだ深みを与えることのできる技法、と筆者は考えている。

ウ 多くの思いを伝えるために、一つの語に深い関連のあるいくつかの語を和歌の中に用いて解釈の幅を広げイメージを膨らませる手法、と筆者は考えている。

エ 同音異義語をダジャレやごろ合わせとしてだけ用いながら、作者がもっとも伝えたい下句へと読者を巧妙にいざなっていく仕掛け、と筆者は考えている。